

連載コラム



みずき野と その周辺の 植物と昆虫



第 81 回

源氏物語の植物たち (7)

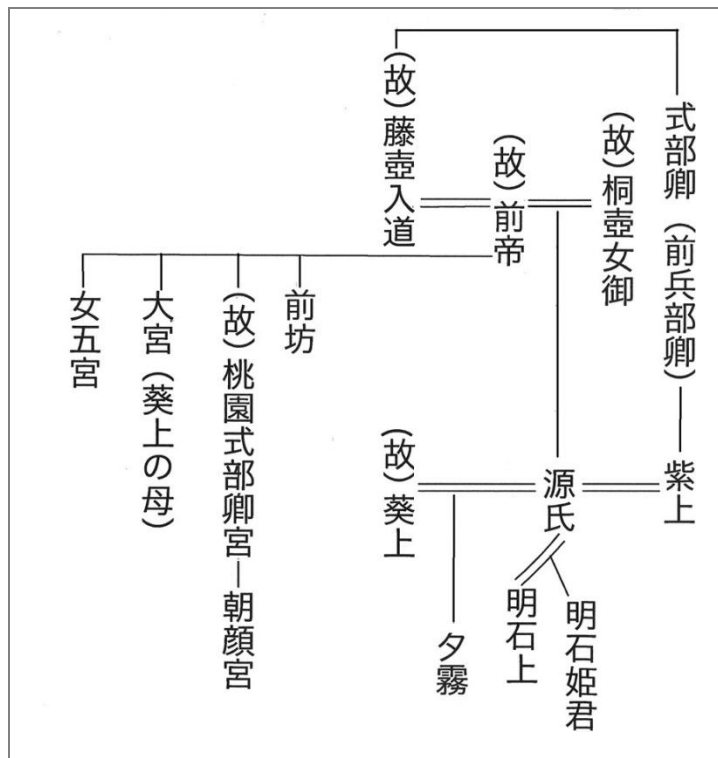


もとよし ふさお
本吉 總男

2025 年 10 月

あさがお
「朝顔」のあらすじ

前回(第80回)に述べた「薄雲」のあらすじの中で、式部卿宮が亡くなったことを書きました。式部卿宮は桃園に住んでいたため、しばしば「桃園式部卿宮」とも呼ばれています。源氏の父である前帝の兄弟ですから、その娘の朝顔宮は高い地位の姫君です。以前は齋院(賀茂神社に奉仕する未婚の皇女)でしたが、父の逝去によって齋院ではなくなりました。朝顔宮と呼ばれているのは、すでに「箒木」(あらすじは第75回「源氏物語の植物たち(1)」参照)の中で、源氏が式部卿宮の姫君に朝顔をたてまつったことが書かれており、早くから朝顔宮と呼ばれていたと思われます。



源氏は朝顔宮に思いを寄せ、何度も便りを送りますが、朝顔宮は返事をしません。桃園邸には故前帝の妹の女五宮が住んでいますが、源氏は朝顔宮が桃園邸に移り住んだという情報を得て、これ幸いと、女五宮に式部卿宮が亡くなったことにお悔みをするという口実で桃園邸を訪ねます。女五宮は源氏が訪ねてきたことにいろいろ感謝の言葉を述べます。話が一段落したところで、朝顔宮にもお悔みせねばと席を立ちます。

源氏は簀の子(平安時代の邸の縁側)を通して朝顔宮方を訪問し、南の廂(簀の子の内側にある細長い部屋)に入れてもらいます。朝顔宮は鈍色(喪中であることを示す濃いねずみ色)の御簾(貴人の座所の前のすだれ)の奥にいて、来客と面会します。

源氏は朝顔宮あさがおのみやに恋心をもって対面しますが、朝顔宮あさがおのみやは父を亡くした喪中の人ですから、源氏が訪ねてくることは迷惑みすです。御簾を隔て暫しやりとりしますが、源氏は失望し、退散せざるを得ません。

源氏は夜になっても目覚めがちで、朝顔宮あさがおのみやの態度が気に入り、翌朝、朝顔宮あさがおのみやの居室の格子こうし(寝殿造の上下2つに別れた戸)までやってきて、そのあたりに咲いている朝顔を折って、歌と一緒に格子より差し入れます。

源氏の歌、

見し折の 露わすられぬ 朝顔の 花のさかりは 過ぎやしぬらん

(お会いした時の朝顔のような美しいお姿を忘れられませんが、朝顔もやがて盛りは過ぎてしまうでしょう。今が花です)

朝顔宮あさがおのみやは自分の気持ちを伝えるべく、また女房たちの勧めもあって、返歌を書きます。

朝顔宮あさがおのみやの歌、

秋はてて 霧のまがきに むすぼほれ あるかなきかに 映る朝顔

(秋も過ぎて霧にけぶる垣根に絡んでいるのかないのかわからぬような朝顔の花が私です)

源氏は、朝顔宮あさがおのみやから送られた青鈍あおにび(青みがかった鈍色にびいろ)の紙(喪中であることを示す)に書かれた美しい筆跡に感心しますが、歌の内容は源氏の意に全くそぐわぬもので、失望します。

しかし世間では、源氏が頻繁に桃園の館を訪問していることが噂になり、紫上むらさきのうえは悩むことになります。もし自分より身分の高い朝顔宮あさがおのみやと源氏が婚姻を結ぶことになれば、自分の身分がどうなるか心配です。源氏はしきりに言い訳をしますが、口も利きません。

それでも、源氏は朝顔宮あさがおのみやに会いたくて、再び女五宮おんなごのみやを慰めるといふ口実で桃園邸を訪れます。女五宮おんなごのみやは、以前と同じことを繰り返し述べるとうたた寝してしまいます。源氏はこれ幸いと朝顔宮あさがおのみやを訪ねますが、前回と同様、冷たい仕打ちを受けます。

むらさきのうえ

あさがおのみや

紫上むらさきのうえの悩みはますます深く、心配した源氏は、「私と朝顔宮あさがおのみやとは特別な関係はないのだから貴方の地位は変わることはない。安心してください。」と説得します。

アサガオ

アサガオは中国から奈良時代に渡来したそうです(広辞苑など)。原産地は不明ですが、熱帯アジアと考えられているようです。しかし、週刊朝日百科「植物の世界」16号によれば、京都大学の探検隊によって、ネパールのヒマラヤ山麓にも野生のものが発見されており、ネパールから中国に導入された可能性もあります。また、当時のアサガオは薄紫色だったそうです。白花が現れたのは江戸時代で、その後いろいろな花色のものが現れたとされています。したがって、朝顔宮あさがおのみやにちなむアサガオも薄紫色だったのでしょう。

現在は、色や形の異なるアサガオがあります。また、平安時代にはおそらく見る事ができなかった外来のマルバアサガオなどが野生し、栽培もされ、目を楽しませてくれます。また、外来の栽培種である西洋朝顔のヘブンリーブルーは、ソライロアサガオとも呼ばれ、美しい空色の花を咲かせます。それらいくつかの写真を載せましょう。



アサガオ
8月中旬 わが家の庭



アサガオ
8月中旬 わが家の庭



アサガオ
7月上旬 わが家の庭



アサガオ
9月中旬 わが家の庭



マルバアサガオ
11月中旬 守谷市本町地区



マルバアサガオ
9月上旬 みずき野第1調整池



ヘブンリーブルー
6月下旬 わが家の庭

「乙女」のあらすじ

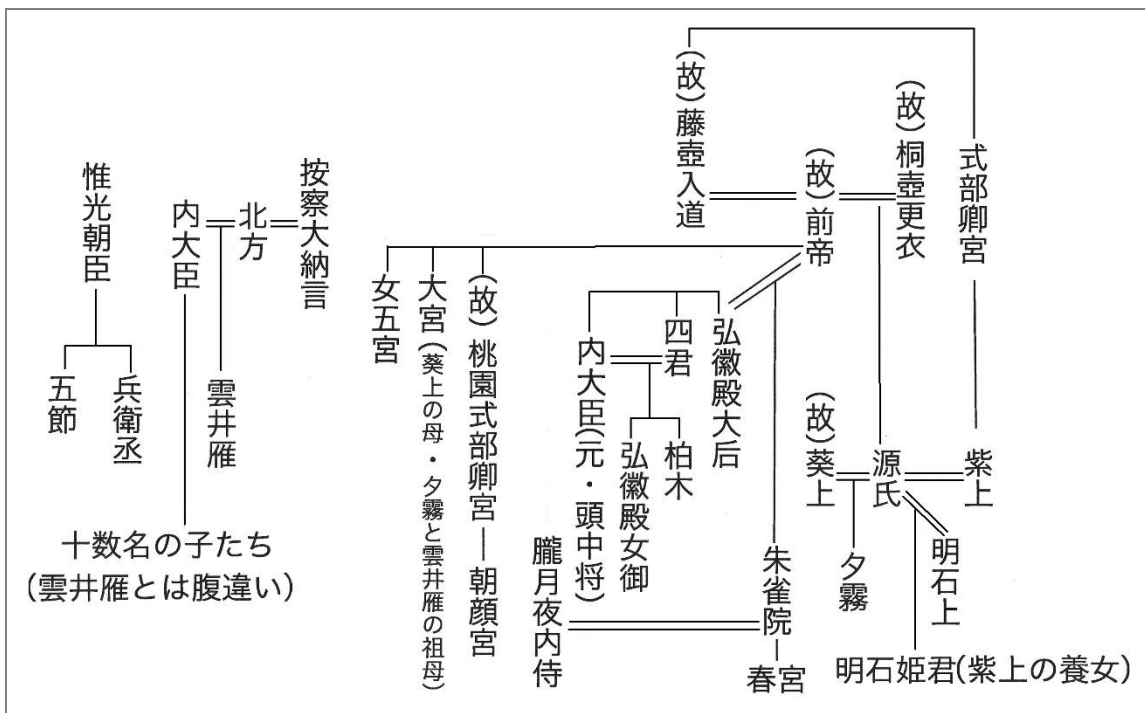
年も改まり、藤壺入道の一周忌が明けたので、人々の衣服も変わりました。源氏は、相変わらず朝顔宮に愛の言葉を送りますが、朝顔宮の態度は変わりません。女五宮は、朝顔宮のかたくなな態度を残念に思っています。朝顔宮が源氏の愛を受け入れて、婿に迎えたかったのです。

物語は源氏と葵上との間にできた息子、夕霧を主人公とする話に移ります。

夕霧は12歳になり、祖母である大宮(女三宮)の邸宅で元服しました。身分上、四位となる資格があるのですが、源氏は学問を極めさせるために夕霧を大学に入学させます。そのため冠位は六位に就くことになり、大宮は残念に思います。

夕霧に字をつける儀式を東の院で行いました。字とは中国の風習に従って、実名のほかに学者や学生がつける名です。

引き続き、夕霧は入学(師のもとに弟子入りすること)し、漢学に優れた師に預けられ、4、5ヶ月のうちに史記を読んでしまうほどの才能を示します。続いて、源氏は夕霧に寮試を受けさせます。寮試とは貴族の子弟を養成する機関である大学寮の試験です。



その頃、源氏は太政大臣(最高位の大臣)になり、昔の頭中将は昇進を重ねて内大臣(左右大臣に次ぐ位で、帝を補佐する)になります。内大臣には雲井雁と呼ばれる娘がいます。内

大臣は多妻で十人あまりの子がいますが、雲井雁くもいのかりの実母はそののち按察大納言あぜちのだいなごんと結婚したので、そちらに引き取られぬように、実母から引き離し、祖母である大宮に預けます。大宮は夕霧ゆうぎりの祖母でもあり、二人は十歳の頃から仲良しで、相思相愛の関係です。

ところが雲井雁くもいのかりの父（内大臣）が夕霧ゆうぎりと雲井雁くもいのかりが特別の仲であることに猛反対で、二人の仲を是認している大宮をも非難します。なお、雲井雁くもいのかりと呼ばれているのは、本人が「雲井の雁もわがことや」と古歌を口ずさんだことに由来します。

内大臣の恨みは、源氏（太政大臣）への対抗意識の表れです。その理由は娘の弘徽殿女御こきてんのにようごが中宮になると思い、世間一般もそう思っていたにもかかわらず、源氏が故藤壺入道ふじつぼのにゆうどうの進言にことよせて、梅壺女御うめつぼのにようご（前斎宮）を冷泉亭の中宮にしたことです。

内大臣は、雲井雁くもいのかりを春宮（皇太子）の中宮にすることを考え、雲井雁くもいのかりを自宅に連れて行ってしまいます。夕霧ゆうぎりと雲井雁くもいのかりは引き裂かれ、大宮も可愛がっていた雲井雁くもいのかりと生き別れ、悲しい思いでした。大宮は夕霧ゆうぎりと雲井雁くもいのかりとの結婚を期待していたのです。

話は五節ごせちのことに変わります。五節ごせちの舞ふじつぼのにゆうどうは、藤壺入道ふじつぼのにゆうどうの喪などあって、しばらく行われませんでした。人の心地もよくなった年に、源氏の提案で行われることになり、按察あぜちの大納言さえもん、左衛門かみの督、近江守良清ごせちの娘が五節ごせちに選ばれました。源氏からこれみつは惟光ごせちの娘を五節ごせちに任じます。この五節ごせちの父、惟光これみつは今は「津かみの守」となり、右京だいぶの大夫うきょうしき（右京職の長官）を兼任しています。京職きょうしきは司法、行政、警察を執り行う役所です。京の都は左京と右京に分けられており、右京職うきょうしきは右京を担当します。都の重職これみつについて、惟光これみつあそんは、以後、惟光朝臣ごせちと呼ばれています。その娘である五節ごせちはほっそりした体つきで大層な美人です。夕霧ゆうぎりはこの五節ごせちを恋します。

題名おとめの「乙女ゆうぎり」は夕霧ゆうぎりが思いを寄せた惟光これみつの娘の五節ごせちと考えたいところです。しかしもうひとつ「乙女おとめ」のタイトルだいらと関係のありそうな箇所があります。源氏が内裏で舞姫を見て、昔、目

五節ごせちとは「五節ごせちの舞姫ごせち」の略。五節ごせちの舞だじょうさいはしんじょうさい大嘗祭だじょうさいや新嘗祭しんじょうさいの時にだじょうさい行われる5人または4人の童女だじょうさいによって行われます。大嘗祭だじょうさいとは帝が即位後、初めて行う新嘗祭しんじょうさいのこと。新嘗祭しんじょうさいは「にいなめさい」とも読まれます。「新嘗祭しんじょうさい」とは天皇が神々に新しく穫れた穀物を神々に供え、自らも食する神事。以前からこの日は国民の祝日でしたが、戦後は名を改め、「勤労感謝の日（11月23日）」として国民の祝日になりました。なお、新嘗祭しんじょうさいは宮中では現在も続いているようです。

に止めた五節(「花散里」と「須磨」に登場する)だった人を懐かしく思い出したことです。早速その人に歌を送ります。

源氏の歌、

乙女子も 神さびぬらん 天つ袖 ふるき世のとも よはひ経ぬれば
(昔の友達で乙女子だったあなたもお歳を召たことでしょう。私も歳をとりました)

五節だった人の返しの歌、

かけていへば 今日のこととや 思ほゆる 日蔭の霜の 袖に溶けしも
(日蔭の蔓を身につけて舞ったのは昔のことですが、まるで今のこのように思われます)

これらを総合して、「乙女」というタイトルになったと思います。

夕霧は五節にも増して雲井雁を忘れることができませぬ。夕霧は進士の試験(式部省で行う省試(=文官登用試験)に合格し、さらに秋の司召(官職に任ずること)によって侍従になります。

源氏(太政大臣)は紫上の父、式部卿宮(以前は兵部卿宮)の五十歳の賀を執り行います。式部卿宮には紫上とは別腹の娘、王女御がおり、冷泉帝の妃で、中宮への候補の一人でしたが、源氏は梅壺女御(前斎宮)を中宮にします。以後、梅壺女御は「秋好中宮」と呼ばれます。「薄雲」(第80回「源氏物語の植物たち(6)」)の中に、中宮が梅壺女御だったころ、源氏との対話の中で、秋を好むことをほのめかす箇所があります。これが秋好中宮という名の由来かもしれません。

源氏は六条京極にある六条院の周辺に広大な土地を手にいれ、六条院を改築し、四季の町をつくります。そして次のような計画を立てます。

未申(南西)の町(秋の町)には秋好中宮を入れます。辰巳(東南)の町(春の町)には源氏、紫上と明石姫君を入れ、丑寅(北東)の町(夏の町)には花散里を、西の町(冬の町)には明石上を入れます。

むらさきのうえ ^{ごよう} 紫 上 の住む場所近くには五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅のほかに秋の草木を混ぜて植
えました。

あきこのむちゆうぐう ^{もみじ} 秋 好 中 宮 の町には紅葉など秋に色濃く染まる木々を植え、滝をつくるなどして秋の野にな
ぞられました。

はなちるさと ^{せんざい} 花散里の住む町は涼しげな泉があって、山里の夏らしい風情があります。住む場所近くには、
前栽 (庭先に植える草木) として、^{くれたけ} 呉竹を植え、^{そうび} 卵の花の垣根を渡し、橘、撫子、薔薇、くたに
などの花々を植えました。

あかしのうえ ^{からたけ} 明石上の町の外側は蔵町があり、それを隔てる垣根には唐竹を植えました。庭には松の木
が繁く生えて雪の風景を伝えます。また、我がもの顔をしていると思わせる ^{ははそはら} 柞原の ^{ははそ} 柞や、名
も知らぬ深山の木などを移し植えました。

上記のような計画通り、源氏が選んだ女性たちが順次、あてがわれた町に分かれて入ります。

六条院を飾るいろいろな植物のうち、これまで掲載していないものを紹介しましょう。

ゴヨウマツ (五葉)

ゴヨウマツにはいろいろな品種がありますが、それらを統括して、広義でゴヨウマツといいます。

植物に詳しいシーボルト (Siebold) とツツカリーニ (Zuccarini) がゴヨウマツに命名した品種は
現在ではヒメコマツという標準和名が付けられて
いますが、広義ではゴヨウマツです。

^{おとめ} 「乙女」に出てる ^{ごよう} 「五葉」は日本の山地に分布
し、栽培にも適したヒメコマツではないかと思
います。

ゴヨウマツは日本列島を中心に分布する常緑の
針葉樹で30メートルに達するものがあります。ア
カマツやクロマツは小さな枝の先端に2枚の葉
をつけますが、ゴヨウマツは5葉が束になってつき
ます。



ゴヨウマツ (ヒメコマツ)
Sieboldと Zuccarini によるスケッチ

写真を撮っていないので、Sieboldと Zuccarini の原図 (Wikimedia から転写) を載せておきました。

ヤマブキ

ヤマブキは広く一般に知られていますが、バラ科の低木で、若い茎が緑色で、黄色い花が4～5月に咲きます。花が一重のもの、八重のものがあります。山吹はよく庭に植えられ、我が家の庭でもよく育ちます。



ヤマブキ 4月上旬 わが家の庭



ヤエヤマブキ 4月上旬 みずき野さくらの杜公園

イワツツジ (岩躑躅)

おとめ
「乙女」に出てくるイワツツジとはどういうツツジか分かりません。広辞苑によれば「岩間に生えているツツジ」とあります。

ここでは、もともと山谷に生えるツツジの写真を載せておきます。



ミツバツツジ 4月中旬 小石川植物園



ゲンカイツツジ 4月中旬 わが家の庭

ハチク (= 呉竹)

クレタケは呉から伝来した竹の意で多くの辞書や辞典には、ハチクのことと書かれています。ハチクは、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国で栽培されています。みずき野付近では見たことがありません。大船フラワーセンターで撮った写真を載せておきます。



ハチク 5月上旬 大船フラワーセンター

ウツギ (= 卯の花)



ウツギ 5月下旬 みずき野どんぐり公園

ウツギは普通に見られる落葉低木で、高さは通常2メートル内外。卯の花は卯月（新暦では5月頃）に咲くので、その名が使われたという説があります。またウツギは漢字では「空木」と書き、茎が中空なのでその名がつけました。花は白く、筒状で群がって咲くのでよく目立ち、古くから垣根によく使われていました。ウツギは北海道から奄美大島までの日本列島と中国に分布しています。私が観察したところでは、花には昆虫が好んでやってきます。

バラ (= 薔薇)

薔薇という語は中国から伝わったもの。薔薇を日本ではバラの当て字として使われることが多いですが、平安時代は薔薇という語がもっぱら使われていたようです。

バラまたは薔薇はバラ全ての総称です。しかしここでいう薔薇がどういうバラかは分かりません。小さな白または淡紅色の花をつけるノイバラか、平安時代にはすでに中国から渡来した

といわれるコウシンバラである可能性もあります。コウシンバラの花は赤く、一重のものと二重のものがあるようですが、私は見たことがありません。コウシンバラについては「中国 コウシンバラ」で検索してみてください。



ノイバラ 5月下旬 取手市上高井地区



淡紅色のノイバラ 5月中旬 取手市上高井地区

リンドウ または ボタン (くたに)

辞書や辞典には、「くたに」とはリンドウまたはボタンと書かれています。ここでは向島百花園で撮ったリンドウ、つくば牡丹園のボタンの写真を載せておきます。



リンドウ 10月下旬 向島百花園



ボタン 5月上旬 つくば牡丹園
(北川道子氏提供)

リンドウはリンドウ科の多年草で9～11月頃紫入りの花が咲きます。本州、四国、九州、中国、朝鮮半島に分布しています。

カンチク (=唐竹)



カンチク 5月中旬 大船フラワーセンター

旺文社古語辞典」は、唐竹^{からたけ}について、「乙女^{おとめ}」中の該当箇所「隔^{からたけ}ての垣に唐竹植^{からたけ}ゑて松の木しげく」を引用し、唐竹^{からたけ}は寒竹^{かんちく}のこととしています。広辞苑も唐竹^{からたけ}を寒竹^{かんちく}としています。小形の竹で、高さ2～3メートルほどです。みずき野周辺では見たことはありません。ここでは大船フラワーセンターで撮った写真を載せておきます。

コナラ、クヌギ、アベマキ (柞)

「柞^{ははそ}」とは、コナラやクヌギなど、現代の分類ではコナラ属の落葉樹をいうのだと思います。コナラやクヌギはみずき野でもよく観察される植物で、コナラは特に文化財公園に、クヌギは中央公園に多く見られます。なお、関西には、クヌギより、クヌギと近縁のアベマキの方が多いと聞きます。

コナラは山野にごく普通の落葉高木です。花期は 4～5月頃。北海道。本州、四国、九州、朝鮮半島、中国に分布します。クヌギはやはり山野に普通の落葉高木で、花期は4～5月。本州、四国、九州、沖縄やアジアの温帯に広く分布しています。アベマキも比較的普通の落葉高木で、クヌギによく似た植物ですが、幹の肌が異なるので区別できます。本州、四国、九州、アジア東部の温帯に分布しています。



クヌギの幹
月下旬 みずき野中央公園



アベマキの幹
1月下旬 みずき野さくらの杜公園

私自身はこれらの植物について詳しくなく、主として、それらがつくるドングリのかたちや幹の肌の違いによって区別しています。ドングリや他のブナ科植物の実^{かくと}は殻斗に支えられて生長します。殻斗とは、苞葉片が癒合^{かくと ほうようへん ゆごう}(くっ付き合うこと)したものです。ドングリの殻斗はお椀状、ブナやシイ(スダジイ)の殻斗は実の全体を覆います。クリのい^{かくと}がも殻斗です。

「乙女」には「我^{おとめ}は顔^{われ}なる柞原^{ははそはら}」と書かれています。柞原とは、「柞^{ははそはら}の繁^{ははそ}る原^{ははそ}」という意味です。前述のように、みずき野には小規模ながら柞原^{ははそはら}が2箇所あります。

ひとつは文化財公園の上の広場です。ここはコナラの林です。もうひとつは中央公園の林で、クヌギの林です。みずき野にも小規模とはいえ、柞原^{ははそはら}があるとは素晴らしいことです。



みずき野文化財公園のコナラの林 8月上旬



みずき野中央公園のクヌギの林 8月中旬

このほか、コナラやクヌギなどに関する写真をいくつか載せておきます。



コナラの葉とどんぐり

9月上旬 みずき野文化財公園から採取

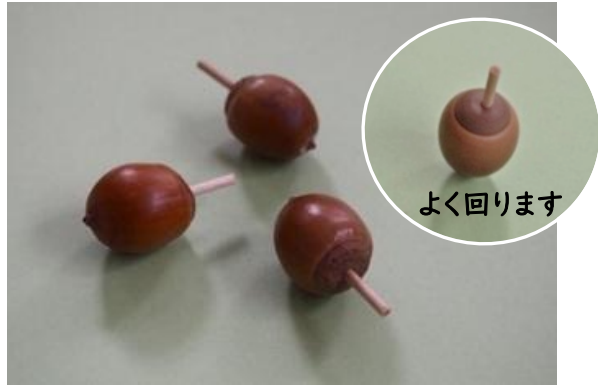


コナラの殻斗の実体顕微鏡写真

9月上旬 みずき野文化財公園から採取
(内側がへこんだ三角形の板状の突起^{とつき}が鱗^{うろこ}のように並んでいる)



クヌギのドングリと殻斗
1月上旬 みずき野中央公園の林



クヌギのドングリ独楽(こま)
1月下旬 みずき野中央公園で採取したドングリにつまようじを刺した

また、^{あかしのうえ}明石上が住む冬^{ははそはら}の町には、^{ははそ}柞原から採取された柞が移植されました。移植に適した若苗の写真も載せておきます。



コナラの若苗
9月上旬 みずき野文化財公園



アベマキの若苗
5月下旬 みずき野さくらの杜公園